

大阪市立自然科学博物館館報

3



大阪市西区靱 2 丁目52

大阪市立自然科学博物館

目 次

大阪における博物館の系譜	1
1. 沿 革	7
2. 現 況	7
3. 職員および人事	7
4. 庶務報告	8
5. 収集保管事業	9
6. 調査研究事業	14
7. 展覧事業	20
8. 普及指導事業	24

大阪における博物館の系譜

館 長 千 地 万 造

はじめに

当館が市立美術館における借り住いから、現在の鞆公園南側の地に移って開館したのは、12年前の昭和33年1月13日であった。この建物は旧鞆小学校の校舎を転用したもので、一応の内部改装を行ない、展示室、研究室、資料室などはあるものの、自然科学の博物館としての機能を果たすための設備は全くないといってよいくらいで、ただ夫々の名前がつけられた部屋があるだけのものであった。

しかしなんとといっても、博物館の命は所蔵標本の質と量であり、また、研究と教育活動であって、館の内容の充実と市民との強い結びつきの中から、それにふさわしい建物が必ず将来実現するであろうことを信じ、常に前向きの姿勢をくずすことなく、この12年間を歩みつけて来たつもりである。

近年、大阪市教育委員会では当館の新築が真けんにとり上げられ、本年度には、自然史博物館建設のための基本構想審議会が設けられ、新しい館のビジョンが描き出された。明年度（昭和45年）には、さらにそれを具体化し、基本計画が作られることになっている。

私たちはさらに前進をつづけなければならない。そのためにも、一度過去における大阪の博物館施設をさぐり、その系譜を明らかにしておく必要がある。

明治時代の大阪の博物館

大阪にはじめて博物館施設が出来たのは明治7年（1874）で大阪博物場と称した。大阪府は同年内務省の許可をえて、東区内本町橋詰町の旧大阪府庁の土地・建物を利用して大阪博物場をつくり、同8年11年に開場した。大阪府史にはその目的を「府下の繁栄を助け人智の発達を図る」と記されているから、明らかに社会教育的目的をもったものとしてこの施設を考えていたようにみえるが、中味は経済知識の普及という目的を主としていたようで、毎年3月15日から6月22日までの100日間を大会として、入場料は5銭、毎月の1・6・3・8日には小会を開き、3銭の入場料をとっていた。会場は商品場と名品場とに分れていて、別に参考品として府下の神社や寺あるいは一般民家の珍蔵品を陳列したという。したがってその性格としては博物館というよりは、むしろ商業奨励館とでもいえるものであったようである。

一方、府は明治11年4月29日常安町18番地に府立教育博物館を開館した。当時の大阪日報（明治11年5月1日付第659号）は開業式の模様を報道しているが、その中で展示の内容を次のようにのべている。

「……同館は宗是町中学校右手にて、入場人は表門にて通券札を請ひ、夫より入場し、入口は品評場にて、右手は菓草盆栽あり、第1室は日本地図、天地球儀、植物品、舶来の軸、第2室は鳥

1870 -----

大阪における

博物館の系譜

1880 -----

1890 -----

1900 -----

1910 -----

1920 -----

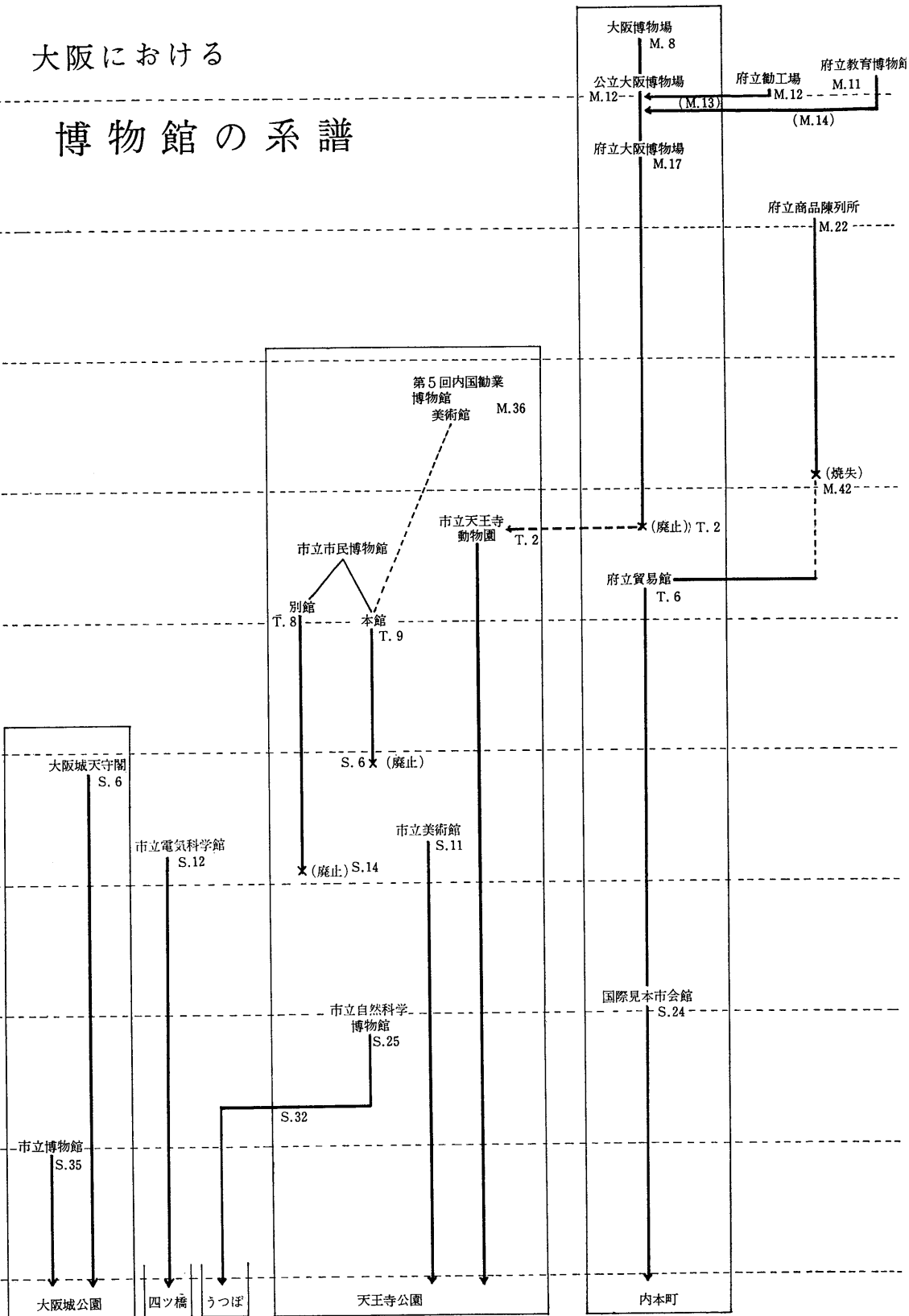
1930 -----

1940 -----

1950 -----

1960 -----

1970 -----



獣の乾物、動物の軸、幼稚園の器具、第5室は米国ボストン府リッチモンド社製の物理器械、第6室は舶来の地図、第7室は視学の器械顕微鏡あり、第8室は化学用薬品、同器械、航海全図、ストープ等なり、第9室は東京法・理・文三学部製の物理器械、第10室は英国ジョンマーシヨル氏の人体図3軸、第11室は各校の写真なり、第12室は日本全図、植物図等にて、入口に出て通券札を請取り出門す。……」

その後、明治14年3月18日、この敷地を師範学校用地とするため、教育博物館は公立大阪博物場（明治12年に大阪博物場を改称）に合併し、陳列室1棟を増築して移転した。

府立教育博物館が設置された直後の明治12年、府立勸工場が江戸堀南通3丁目に竣工した。これは府下の工業製品を収集展示して、工業奨励館としての役目を果たしたが、経済発展を目的とする点では博物場と一致し、どちらも、府の勸業課に属していたことから、翌13年6月30日に廃止し、陳列品は公立大阪博物場に移した。

こうして、大阪博物場は商工業知識の普及啓蒙と、学校教育・社会教育とくに科学知識の普及啓蒙の施設となって行った。その経営は府税によって買った公債の利子と入場料で維持していたが、大阪府は内務省の許可をえて直営にし、明治17年3月7日府立大阪博物場と改め、明治18年5月からは年間1月20日から12月25日まで開くことにした。（当時の入場料は平日1銭、土曜日2銭、大祭・祝日、日曜日は3銭であった）。それ以後、明治19年には敷地を拡張し、陳列室や事務所の増築、21年には美術館の建設、29年には再び敷地の拡張、ついで、売品室の建設、能楽堂の改築、古器物陳列室、諸会催所の建設を行い、明治36年天王寺公園で開かれた第5回内国勸業博覧会を機会にさらに設備を充実した。たとえばこの博覧会に出された動物を買いとって動物園を敷地内につくったりなどした。こうして大阪博物場は当時のアミューズメント・センターとなり、東区史によれば、春秋2回的美術館の展覧会や共進会・陳列会は勿論のこと、動物園も大いににぎわい盛況であった。またここでは朝顔・金魚・牡丹・菊などの品評会や、お茶の会、琴や舞の講習会などで催されている。

このような博物場は当時日本の各地方でつくられたといわれ、その中で注目されるのは、札幌博物場（天産部・史伝部・勸業部よりなる。明治40年北海道帝国大学が設置されたとき、同大学農科大学の附属博物館となり今日に及ぶ）、函館博物場などである。一方中央では明治4年に文部省博物館が開かれた。このように明治初期に博物館・博物場が各地で設置されたのは、当時の海外における万国博覧会への参加によって、先進諸国の博物館施設に刺戟され、また参加出品するために全国から各地方の物産が政府の手によって集められたことと共に、当時の我が国の経済的發展のために天然資源の開発が急務であり、その普及、啓蒙のためにも博物館（場）が必要であったものと思われる。明治初期に開かれた万国博としてはパリ（第5回万国博、1867年・慶応2年）、ロンドン（1871～1874・明治4年～7年）、ウィーン（1873年・明治6年）、フィラデルフィア（1876年・明治9年）、パリ（1878年・明治11年）などがあり、その他にもシドニー（1879年・明治12年）、メルボルン（1880年・明治13年）で大きな国際的な博覧会が開かれ、日本はこれらに参加・出品している。

大阪府は明治23年に商品陳列所を堂島浜通2丁目に開き、商業奨励につくしたが、明治42年7月31日の大火で全焼し、その後は1部の業務を府庁内で行なっていた。しかし、商工業都市として発

展の途をたどって来た大阪にとっては、商工業の発展・貿易の振興のための施設が強く要望され、ついに大阪博物場の敷地が商品陳列所再建のために使われることになり、大正2年大阪博物場は廃止され、そのあとに府立貿易館が建設された。現在の国際見本市会館、大阪商工会議所のあるところがそれである。大阪博物場内の動物園は天王寺公園内に移され、大阪市立動物園が発足した。

大正時代の大阪の博物館

明治42年4月に市制をひいた大阪市は、御大典記念事業として天王寺公園内に市立大阪市民博物館を建設することを決め（大正4年10月27日市会で議決）、大正8年2月1日に開館した。大阪市教育紀要第1回（1925）によれば、その目的は「主として一般市民に通俗的教育を施し併せて外来人に対し本市を紹介するを以て目的とす」とあり、明らかに社会教育を目的としたものであった。

施設は本館と別館の2つからなり、本館は明治36年に開かれた第5回内国勸業博の美術館の建物を利用し、別館は新築されたものである。

展示内容は5部に分かれ次のようになっていた。

本館

- 歴史部（大阪の歴史）
- 市勢部（財政・電鉄・水道・港湾・土木・下水・公園・教育・衛生・社会事業等）
- 商工部（商工業資料）
- 都市生活部（大阪の都市計画・外国における都市計画）

別館—通俗科学部（電気・機械・物理・化学・天文・気象）

なお館内には図書室・休憩室を備えていた。

展示は大正15年に変更されて次のようになった。

本館

- 皇室と大阪
- 都市計画
- 都市の教化
- 都市の経済
- 郷土資料その他

別館—通俗科学部（動力・通信・軍事・航空・天文）

市民博物館では教育活動が活発に行われており、日常講演・日曜講演・市民講座などによって、専門的な知識の普及や大阪市政のPRなどが行われ、学校・青年団・会社・商店などの希望に応じて出張講演も行なった。また夏季学校舎といって、夏休みに小学児童を集めての講習会なども行なっていた。さらに、博物館では社会教育的な映画の製作、フィルムの収集を行ない、今日のフィルムライブラリーの役割を果たした。おもしろいことは、大正14年から15年を境にして展示テーマに大きな変化があったことであるが、教育活動の面でもその内容にかなりの変化があったことがうかがわれる。大正14年までは、毎月第1日曜日は子供デーとして、お伽話・映画・理化実験をしたり、日曜講演には講演・浪花節などの実演もあったようである。日本の軍国主義化がこのころから急ピッチで進められたことのあらわれとみてよいであろう。市民博物館は市民に非常にしまされたようであり、入館者数は年間およそ20万人前後と推定される。当時の人口からみればかなり高い利用率を示しているのではないだろうか。現在40才代以上の人々からは、よくこの市民博物館の思い出

を聞かされる。

市民博物館は昭和6年に本館を閉鎖することになる。当時の教育紀要には次のように記されていて、その事情を知ることが出来る。

「……本館は第5回内国勸業博覧会の美術館であって、最近著しく腐朽せしため之を閉鎖し館の新築可能のときまでは館内に陳列せし各種資料は大阪城天守閣に移し現在では唯科学館としての別館のみを存している。」

この別館も昭和14年には廃止されたらしく、昭和15年の紀要からは姿を消してしまった。

市立市民博物館が創設された大正初期から昭和初期にかけては、わが国の博物館建設の波の第2の高まりがあった時期であって、山口県立山口博物館（1917年・大正6年）国立交通博物館（1921年・大正10年）、鎌倉国宝館（1928年・昭和3年）、金沢文庫（1930年・昭和5年）、上田市立博物館（1929年・昭和4年）、松本市立博物館（1906年・明治39年）、京都国立博物館（1897年・明治30年）、奈良国立博物館（1895年・明治28年）などの国・公立博物館、および齊藤報恩会博物館（1923年・大正12年）、秩父自然科学博物館（1921年・大正10年）、名和昆虫博物館（1919年・大正8年）、天理参考館（1926・大正15年）などの私立あるいは法人の博物館が日本各地につくられた。しかもその大部分は現在も地方博物館の中堅クラスあるいはリーダーとして活躍している。

大阪における近代的博物館の建設

博物館が単なる陳列館あるいは通俗教育機関でなく、資料の収集保管、学術研究、社会教育といった役割を持った近代的な博物館として考えられるようになったのは、わが国では1930年（昭和5年）ごろからである。昭和6年には国立科学博物館が新館を建設して面目を一新し、東京国立博物館も同じころ新館が出来上った。

大阪では昭和11年（1936年）天王寺の旧住友邸跡に市立美術館が建設され、また翌12年（1937年）には四ツ橋に電気科学館が建設され現在に至っている。大阪城天守閣は（昭和6年・1931年）に建設され、安土・桃山時代の歴史資料を多く収集保管し、展示を行なっている。第2次世界大戦後の1950年代は、アメリカの教育制度の影響もあってわが国において特に立ち遅れている社会教育の重視が叫ばれ、また一方、戦後の日本の発展の方向を文化・平和国家の再建に求め、博物館の建設が各地で非常に盛んになったことは事実である。市立自然科学博物館（昭和25年・1950年）市立博物館（昭和35年・1960年）が創設されたのもこの時期である。これら5館の萌芽は夫々過去の大阪における博物館施設に見出すことが出来る。大阪博覧場美術館および第5回内国勸業博覧会美術館、市民博物館別館科学部、府立教育博物館の1部、市民博物館本館歴史部などがそれである。しかし大阪における博物館事業は初期においては府によってなされ、大正時代に入ると市の手によだねられてしまった感があり、また市立市民博物館も現在の博物館に何らの資料も遺していない。その最も基本的な原因は、博物館を単なる陳列所および通俗教育施設としか認識しなかったことによるものと思われる。

近年、明治100年記念事業として、各地で公立博物館が建設されつつある。欧米諸国の大博物館はすべて数百年の歴史と伝統を持ち、それゆえに国家・民族の文化発展に大きく寄与しつづけて来た。たかだか10年ないし20年で消えてゆく博物館であっては、皮相的にみれば一時は社会教育的効

1. 沿革

昭和24年11月8日：一自然科学博物館開設準備委員会設置
 昭和25年4月1日：一自然科学博物館費予算に計上
 昭和25年11月10日：一市立美術館2階廊下1部に展示開始
 昭和27年4月17日：一博物館相当施設に指定

昭和27年6月2日：一大阪市立自然科学博物館条例および規則制定
 昭和27年7月10日：一博物館法第10条により登録第2号
 昭和32年6月7日：一市立美術館より現在地に移転
 昭和33年1月13日：一開館
 昭和39年3月31日：一市条例および規則改正現在に至る

2. 現況

2-1 所在地

大阪市西区靱2丁目52

2-2 施設

敷地面積：-2,376.0m²
 延坪：-2,181.8m²
 (内訳)

展示室 785.4m²
 資料室 249.2m²
 研究室 113.9m²
 図書室 59.4m²
 工作室 52.8m²

管理室 145.2m²
 会議室 66.0m²
 講堂 597.5m²
 その他 775.9m²

2-3 開館時間・入館時間・休日

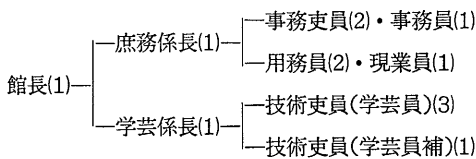
開館時間：一午前9時～午後5時

入場料：一無料

休日：一毎週月曜日・毎月末日・国民の祝祭日年末年始(12月28日～1月4日)
 他に展示室の整備のため臨時休館することがある。

3. 職員および人事 (昭和45年2月1日現在)

3-1 職員の配置 () 内人数



3-2 職員名簿

館長 千地万造 岸和田市並松町10番2号
 TEL 0724(22)1540
 庶務係長 坂越謙治 大阪市住吉区中加賀屋町2-90
 TEL (685)5525
 事務吏員 岡本益満 箕面市牧落545
 " 外嶋実 奈良県桜井市大泉町中川筋340
 事務員 渡辺幸雄 神戸市東灘区魚崎町横屋379
 学芸係長 日浦勇 富田林市清水町17番327号
 学芸員 柴田保彦 京都府相楽郡精華町祝園五反畑11-13
 学芸員 瀬戸剛 西宮市津門綾羽町5-28
 " 宮武頼夫 大阪市港区弁天4丁目5番17-201
 学芸員補 両角芳郎 堺市永代町1丁目3-3岩橋方
 用務員 内本光次 羽曳野市南恵我野荘1丁目2
 " 大谷春雄 大阪府南河内郡美原町丹上
 現業員 池田昭利 大阪市東区法円坂町法円坂住宅8-8

3-3 職員の異動

3-3-1 定数の推移

職種	年別							
	37	38	39	40	41	42	43	44
館長	1	1	1	1	1	1	1	1
係長	2	2	2	2	2	2	2	2
事務員	2	2	3	2	2	1	2	2
学芸員	1	1		1	1	1	1	1
	3	3	4	3	3	3	4	4
業務員	1	1						
	2	2	2	2	2	2	2	2
嘱託	1	1	1	1	1	1	1	1
	2			1	1	1		
合計	14	13	13	12	13	12	13	13

3-3-2 異動 (昭和43年4月1日-昭和45年2月1日)

昭和43年4月1日 宮武頼夫 非常勤嘱託より学芸員に昇格
 昭和43年5月1日 外嶋実 土木局下水道本部管理課より当館へ
 昭和44年3月31日 波田重熙 願により退職
 昭和44年4月1日 両角芳郎 新規採用

4. 庶務報告

4-1 入館者数集計

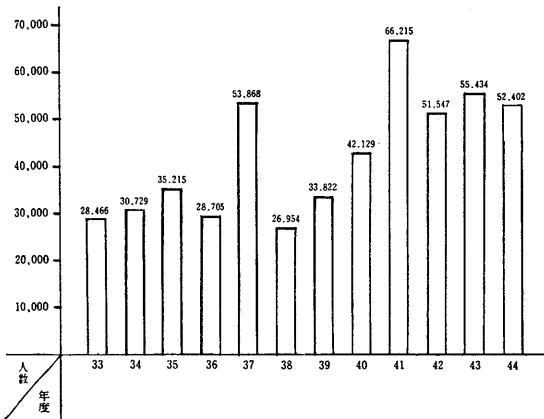
4-1-1 昭和43年度

	団体	幼児 小学生	中学生	高校 大学生	一般	合計	備考
4	432	1,650	424	178	2,210	4,894	
5	1,072	745	156	120	1,371	3,464	
6	843	806	246	164	1,220	3,279	
7	1,342	662	633	160	686	3,483	
8	549	1,192	873	152	1,141	3,907	
9	1,224	1,147	282	124	981	3,758	
10	748	828	236	144	1,209	3,165	
11	2,841	644	225	115	969	4,794	
12	476	558	154	56	600	1,844	
1	267	338	92	60	492	1,249	
2	2,664	565	128	121	668	4,146	
3	3,036	3,038	306	275	10,796	17,451	特別展
合計	15,494	12,173	3,755	1,669	22,343	55,434	

4-1-2 昭和44年度

	団体	幼児 小学生	中学生	高校 大学生	一般	合計	備考
4	1,670	5,820	2,136	510	2,691	12,827	特別展
5	720	837	234	110	1,514	3,415	
6	278	892	267	249	1,439	3,125	
7	948	2,912	331	124	1,750	6,065	
8	564	1,940	532	171	1,700	4,907	
9	853	1,141	259	148	963	3,364	
10	319	952	276	70	1,130	2,747	
11	1,147	863	181	100	982	3,273	
12	720	448	82	59	418	1,727	
1	712	388	87	35	407	1,629	
2	2,693	546	107	95	635	4,076	
3	2,650	1,359	307	67	864	5,247	
合計	13,274	18,098	4,799	1,738	14,493	52,402	

4-2 入館者数年度別推移



44年8月6日～12日於阪神百貨店「くらしの中に生きる鉱物展」入場者58,612人

4-3 昭和44年度実施工事

昆虫資料室温度調整整備工事 工費 693,000円
 植物資料室, 地虫資料室, 宿直室窓枠改修工事 工費 737,000円

4-5 予算の推移

(単位千円)

歳出予算	年度	40	41	42	43	44
第1部		3,463	3,345	3,827	4,160	4,347
第2部		1,000	1,000	1,310	1,500	1,730
合計		4,463	4,345	5,137	5,660	6,077

4-4 昭和44年度予算

歳入	
博物館設備補助金	80,000円
雑収(パンフレット売上げ代)	150,000円
合計	230,000円
歳出(1部)	
1. 展覧事業費	1,304,000円
2. 調査研究事業費	825,000円
3. 資料収集保管事業費	1,091,000円
4. 普及指導事業費	359,000円
5. 一般維持管理費	768,000円
小計	4,347,000円
(2部)	
自然科学博物館整備費	1,430,000円
新館建設調査費	300,000円
小計	1,730,000円
合計	6,077,000円
但し人件費をのぞく。	

5. 収 集 保 管 事 業

5-1 昭和43, 44年度収集保管事業概要

5-1-1 地学部門

昭和43年度

a) 購入標本

瀬戸内海海底産ナウマンゾウ臼歯とシカの角 (68—24. F2952, F2953, F2954)

島根県温泉津北方沖産ナウマンゾウ左牙

(模型68—35. F2955)

アメリカ産化石ペコプテリスなど 13点

(68—44. F2926～F2938)

中瀬鉱山産輝安鉱 2点 (68—59)

b) 主な寄贈標本

つば石 (68—25. R565) 山本勝吉
丹波帯の輝緑凝灰岩 (68—26. R566～567)

渡辺 昇

イタリア産ジュラ紀アンモナイト 7点
(68—29. F2945～F2951) 池辺展生

アラヤ産三畳紀アンモナイト 5点
(68—45. F2940～F2944) 波田重照

岐阜県赤坂産ペルム紀サンゴ
(68—47. F2648) 山際延夫

北海道石狩郡当別町獅子内層模式地の化石有孔虫
151点 (68—58. F10915F～F11065F)

小久保公司

c) 主な館員の採集標本

大阪市深層ボーリングOD-1の化石有孔虫 94点
(68—23. F10821F～F10914F)

シンガポールの花崗岩と石灰岩
(68—27. R568, R569)

三波川帯紅レン片岩と緑レン岩 9点
(68—33. R572～575, R578)

結晶片岩中の石綿 (68—34. M1269)

流紋岩 (68—43. R576)

能登産植物化石と平床層貝化石
(68—46. F2956～2982, F2983～2998)

奈良県榛原の貝化石 21点 (69—11, 69—12)

d) 館員の採集出張

(採集のための出張でなくても、資料を採集した場合はここに記述する。)

- 石川県能登半島(4月19～22日)(千地)
能登半島地質巡検指導ならびに有孔虫化石の研究
- 東南アジア, マレーシア・タイ・カンボジア(7月16日～9月24日)(波田)
大阪市立大学第5次東南アジア学術調査隊の地質班
隊員として参加。同時に岩石, 化石の採集
- 和歌山県白浜町(6月24, 25日)(千地)

有孔虫資料採集

- 静岡県掛川市周辺(10月1～4日)(千地)
浮遊性有孔虫による表日本新第三系の生層序調査と
有孔虫化石採集
- 和歌山県日高郡由良町付近(44年1月2～6日, 13
～20日, 10～17日)(波田)
秩父累帯の地質学的研究
- 奈良県宇陀郡榛原町(12月22日, 44年2月16日)
(千地・波田) 普及行事指導および化石採集
- 和歌山県西高野街道(44年3月6, 26日)(波田)
普及行事下見・指導および岩石採集

昭和44年度

a) 購入標本

インド産月長石他6点鉱物標本
(69—13. M1293～M1299)

菱マンガン鉱他19点鉱物標本
(69—77. M1300～M1319)

螢光鉱物 Autunite 他12点
(69—84. M1321～M1333)

b) 主な寄贈標本

岡山県鷲羽山沖海底産ナウマンゾウ臼歯とシカの角
(69—17. F4057, 4058, 4059) 紀平 肇
朝鮮咸北の花崗岩類, 苗木の花崗岩類, 清水トネ
ルの岩石など 105点

(69—19. R626～730) 京大地鉱教室
フィリピン産テクタイト

(69—78. M1320) 千地万造
青森県産メノウ(舍利石)

(69—85. M1334) 浅尾虚遊

c) 大阪地下の貝化石の整理(69—90～69—108)

地下鉄工事などによって大阪地下の沖積および洪積層から採集された貝類化石は相当な量に達した。そして「大阪市内地下の貝類化石」として発表もされた。そこで、いままでに他の化石といっしょにF番号で、登録されていたもの、および未登録のものを一括し、分類順に整理・再登録した。(二枚貝Q-1～Q-406, 巻貝・ツノ貝Q-1001～Q-1548)これにより非常に利用し易くなった。今後、大阪地下の化石はこのQ番号で登録していく予定である。なお、それによりF番号のうち空白になるものが若干でたが、混乱を避けるためそのうめあわせはしない。

d) 館員の採集出張

(調査研究や普及行事のための出張でも、資料収集と関連するものはここで記す。)

- 二上山(5月15日)(両角)
地質調査と岩石採集

- 高知県安芸市（5月15～18日）（干地）
第三紀有孔虫化石資料収集
- フィリピン（マニラ・ダバオ・プエルトプリンセサ）
（6月29日～7月12日）（干地）
フィリピン自然史調査のための予備調査ならびにパ
ナイ島新第三系・第四系の化石資料収集
- 兵庫県川辺郡多田鉱山（8月9日）（両角）
普及行事下見
- 京都市大文字山（9月13日）（両角）
普及行事下見と鉱物採集
- 和歌山県御坊市（9月25～29日）（両角）
地質調査とイノセラムス化石採集
- 岐阜県郡上郡八幡町美山（10月16日～18日）（干地）
- 神戸市奥畑（10月26日）（干地・瀬戸・両角）
普及行事指導と植物化石採集
- 富山県婦負郡八尾町（10月30日～11月2日）（干地）
瀬戸内地域の自然発達史の研究調査
- 奈良県榛原町（11月7日，12月21日）（両角）
普及行事下見・指導と化石採集
- 岡山県津山市（2月25日～3月4日）（両角）
勝田層群の地質調査と化石採集

5-1-2 動物学部門

a) 館員による採集

五島列島福江島の両生爬虫類その他，I B P 石鎚山調
査の際の採集品など。

b) 主な寄贈標本

ハコエビ	2点	山添数一氏
口永良部産エラブウミヘビ	2点	
	多原義徳・東井昇之進氏	
北米・メキシコ産魚類（主として淡水魚）	14種33点	久保敦弘氏
九州産ベッコウサンショウウオ	1点	西岡鉄男氏
北洋産タラバガニ	1点	都築嘉雄・沢田隆司氏
ヤクシマタゴガエル	4点	倉本 満氏
ヤモリの1種（プラチウルス）	1点	安田民雄氏
シンガポール産プラチウルス	1点	浅井利勝氏
ツシマスベトカゲ・アムールカナヘビ	各1点	阿比留公弘氏
大阪湾産各種脊椎・無脊椎動物	多数	浜名 巖氏
福岡県産カエル	6種30点	倉本 満氏
ベルシャ湾産ハマギギ	1点	浅井利勝氏
インド洋産トビウオ	1点	〃
ボルネオ産両生爬虫類	約30点	
	粉川昭平・堀田 満氏	
韓国産スズガエル	6点	藤川和男氏
奄美産リュウキュウアカガエル	5点	倉本 満氏
和歌山県産海産魚類	30点	鹿取秀雄氏

このうち，浜谷氏によって寄贈された標本は，氏が十数
年をかけ大阪湾各地で採集された各種海産動物である。
大阪湾の汚染と沿岸の変化ははげしく，動物相は刻々と
貧弱化している今日，これらの標本は歴史的資料として
も貴重である。現在までに当館で集積した大阪湾産標本
と併せて今後色々な面で役立つであろう。ただ，現在の
ところ，未整理で，充分利用できる段階までにはいたっ
ていない。

5-1-3 昆虫学部門

a) 館員による採集

日本産昆虫の平均的収集，大阪産昆虫の完全な収集お
よび第四紀化石昆虫を集める目的で担当学芸員（日浦・
宮武）が行なった出張は次の通りである。便宜上調査研
究のための出張及び普及行事の予備調査なども含めて記
述する。（担当者名はH-日浦，M-宮武と略する）

43年4月1日	能勢初谷	一般昆虫 (M)
4月4日	能勢笹部～初谷	水棲昆虫 (M)
4月14日	京都府割尾坂	一般昆虫 (H・M)
4月16日	二上山	蝶の食草分布調査 (H)
4月19日	能勢ノ鳥居～吉川	チョウ・キジラミ (M)
	箕面市小野原	大阪層群昆虫化石 (H)
4月21日	兵庫県武田尾～宝山寺	一般昆虫 (H・M)
4月25日	泉南郡孝子	カンアオイ分布調査 (H)
4月27日	河内葛城山	昆虫相調査 (H)
4月28日	能勢笹部～初谷	水棲昆虫・一般昆虫 (H・M)
5月1日	金剛山	一般昆虫 (H・M)
5月12日	奈良春日山	昆虫相調査 (H・M)
5月15日	金剛山	昆虫相調査 (H)
5月23～25日	滋賀県マキノ	一般昆虫 (M)
5月26日	兵庫県武田尾～宝山寺	ハチ類 (H・M)
5月30日	奈良春日山	昆虫相調査 (H)
6月1日	和泉市榎尾山	一般昆虫 (H)
6月6日	金剛山	昆虫相調査 (H)
6月7日	和泉葛城山～牛滝	一般昆虫 (M)
6月9日	奈良春日山	昆虫相調査 (M)
6月13日	能勢初谷	昆虫生態調査 (H・M)
6月16日	能勢初谷～妙見山	蝶幼虫 (H・M)
6月23日	奈良春日山	昆虫相調査 (H)
6月30日	愛媛県各地	一般昆虫 (M)
～7月8日	皿ヶ峯，石鎚山等	
7月5日	京都府相楽郡笠置	一般昆虫 (H)
7月18日	奈良春日山	昆虫相調査 (H・M)
7月21日	金剛山	一般昆虫 (H)
7月23日	笠置～柳生	一般昆虫 (H・M)

7月25～27日 三重県おかも池 一般昆虫 (H)
 8月1～3日 兵庫県鉢伏山 一般昆虫 (H・M)
 8月7日 奈良春日山 昆虫相調査 (H・M)
 8月9日 三重県名張市 一般昆虫 (H)
 8月16～25日 対馬 一般昆虫 (H)
 8月17～20日 和歌山県大塔山 一般昆虫 (M)
 9月4日 八尾市高安山 直翅目 (H・M)
 9月6日 奈良春日山 昆虫相調査 (H・M)
 9月7日 羽曳野道明寺 直翅目 (H・M)
 9月8日 能勢初谷 キジラミ食性調査 (M)
 9月18日 能勢一ノ鳥居 直翅目 (H・M)
 10月18日 和泉市光明池 一般昆虫 (H)
 10月20日 能勢初谷 一般昆虫 (M)
 10月27日 和泉市光明池 トンボ等 (H・M)
 11月8日 奈良春日山 昆虫相調査 (H・M)
 11月22日 箕面市宿久庄 大阪層群昆虫化石 (H)
 11月26日 奈良県生駒郡松尾山 越冬昆虫 (H)
 能勢初谷 キジラミ生態調査 (M)
 12月1日 松尾山 越冬昆虫 (H・M)
 44年4月10日 和泉市榎尾山 一般昆虫 (H)
 4月11日 北河内郡私市
 水棲昆虫・一般昆虫 (M)
 4月13日 河内葛城山 一般昆虫 (H)
 奈良県当麻町竹ノ内 水棲昆虫 (M)
 4月19～20日 滋賀県伊吹山 一般昆虫 (M)
 4月20日 天理市竜王山 昆虫相調査 (H)
 4月23日 能勢初谷 蝶の食草調査 (H・M)
 4月27日 金剛山 一般昆虫 (H)
 4月29日 金剛山 一般昆虫 (M)
 5月1日 和泉市側川谷 昆虫相調査 (H)
 5月8日 能勢初谷 蝶の食草調査 (H)
 5月11日 奈良県当麻町竹ノ内 水棲昆虫 (M)
 5月15日・18日 天理市布留 蝶幼虫 (H)
 河内長野市三門市 水棲昆虫 (M)
 6月1日 天理市布留 蝶幼虫 (H・M)
 6月2～5日 長崎 一般昆虫 (H)
 6月15日 滋賀県池河内 水棲昆虫 (H・M)
 6月27～29日 奈良県和佐又山 一般昆虫 (M)
 7月6日 河内葛城山 トンボ等 (H)
 7月10日 能勢妙見山 一般昆虫 (M)
 7月23～27日 大山・鏡ヶ成 一般昆虫 (M)
 8月7～12日 北海道留萌～天塩 一般昆虫 (H)
 8月23, 26日 奈良県室生村大野
 一般昆虫 (H・M)
 8月27～28日 河内葛城山 一般昆虫 (H)
 9月3日, 6日, 9日 京都府新祝園
 直翅目 (H・M)
 9月28日 富田林市喜志 蝶幼虫 (H・M)

10月12日 兵庫県青野ヶ原 トンボ等 (H)
 11月16日～12月25日 フィリピン諸島
 一般昆虫 (H・M)

b) 購入標本

アフリカ産フタオチョウ, マレー産アゲハ等 35点

c) 寄贈標本 (受入順)

昭和43年度:

台湾産蝶	55点	張 保信氏
ホシボンキチョウ	4点	湯川淳一氏
愛媛産チョウ・セミ等	20点	愛媛大学農学部昆虫学研究室
奈良・三重県産オサムシ	5点	土井仲治郎氏
沖縄・八重山産昆虫	57点	溝口 修氏
羽曳野市産ハッチョウトンボ	6点	庄司晃三氏
オオカマキリモドキ	2点	倉本 満氏
琉球産昆虫	65点	東 清二氏
島根県産昆虫	1000点	網代恒夫氏

昭和44年度:

ゴミムシ	1点	吉川正彦氏
屋久島産セミ・チョウ等	3点	芝田太一氏
日本・琉球産甲虫同定済標本 (イッカクチュウ科・ハナノミ科・ゴミムシ科・カミキリムシ科・コメツキ科・コガネムシ上科等)	1690点	芝田太一氏
ダイコクコガネ	9点	網代恒夫氏
アオスジアゲハ・ゴングラチョウ	43点	久川 健氏
ペルシャ産トンボ	2点	浅井利勝氏
北海道産昆虫	243点	土井仲治郎氏
高知県産チョウ・セミ	7点	波田重熙氏
大阪産昆虫	81点	中村新次郎氏
小笠原・南方定点産昆虫	15点	長谷川 仁氏
沖縄・石垣・波照間島産蝶	24点	桑原英夫氏
奄美産クワガタ	8点	栄 政文氏
茨城・福島産蝶	62点	米田重玄氏
八重山産昆虫等	42点	近畿大学農学部生物研究会
白樺湖・山中湖産産昆虫	100点	谷 幸三氏
志賀高原・十和田産トンボ	9点	田端 修氏
近畿地方産トンボ・半翅類	33点	尾花 茂氏
福井県新庄産昆虫	29点	谷 幸三氏
宇治産キマダラヒカゲ	1点	井上 清氏
徳之島産トンボ・甲虫	64点	中村新次郎氏
ヨツボシトンボ praenubila 型	1点	宮崎俊行氏
英彦山トゲオイトトンボ	12点	中条道崇氏
近畿地方産トンボ	20点	植村好延氏
住吉区産等ギンヤンマ	7点	桑原英夫氏
台湾産ウラナミジャノメ	50点	溝口 修氏

大島産昆虫	200点	武庫川女子大学 野生動物研究会
ミドリシジミ類標本	176点	溝口 修氏
ウクライナ産蝶	121点	野口好司氏
北見産ヒメギフチョウ	2点	野口好司氏
八重山産チョウ	5点	木村健太郎氏

d) 外国産昆虫の交換状況

昭和43年度から、研究用又は展示用に外国産昆虫と日本産昆虫の交換を行なっているが、昭和44年末までに受け入れた資料及び受け入れ先は下記の通りである。

北米産キジラミ液浸標本	4点	Dept. Ent., Univ. Kansas
マルバネシロチョウ	2点	British Museum (Nat. Hist.)
インド産キジラミ	35点	Dr. Mathur (India)
北米産蝶	119点	Mr. Davies (California)
カリフォルニア産蝶 (受贈)	12点	Dept. Ent., Univ. California, Riverside
北米産蝶類	105点	California Academy of Sciences
北米産キジラミ	6点	U. S. Nat. Museum
アフリカ産キジラミ及びツノゼミ	79点	Dr. Capener

同定済アメリカ産キジラミ	71点	Dr. Jensen (Univ. California)
スウェーデン産キジラミ	190点	Dr. Ossiannilsson (Agr. Coll. Sweden)

カナダ産蝶 (受贈)	37点	河原畑勇氏
カリフォルニア産蝶	77点	上島法博氏
ソヴィエト産蝶	594点	Mr. A. Tsvetajev

5-1-4 植物学部門

昭和43年度

a) 担当学芸員の資料収集に関する出張 (主目的が調査研究・普及指導等にあつて、あわせて資料収集をおこなった場合をふくむ)

- 4月6日 大阪府泉南郡岬町多奈川, 池谷, 孝子
- 4月14日 堺市一和泉市, 泉北ニュータウン予定地, 光明池
- 4月21日 岐阜県山県郡美山村
- 4月27日 大阪府南河内郡河南町伏越峠
- 5月1日 大阪府金剛山
- 5月13日 滋賀県伊吹山麓
- 5月18日 和歌山県高野山
- 5月23日 三重県亀山市野登山
- 6月13日 大阪府泉大津市大津川川口付近
- 6月5日 京都府相楽郡笠置——奈良市柳生
- 7月7日 大阪市立大学付属植物園

- 8月12日 奈良県宇陀郡曾爾村
- 8月22—24日 奈良県吉野郡洞川
- 9月25—29日 長野県大町市
- 10月13日 大阪府泉南郡泉南町
- 10月26日 大阪市長居公園
- 10月30日 東大付属小石川植物園
- 11月13—15日 徳島県名東郡佐那河内村
- 11月17日 神戸市六甲山
- 12月8日 神戸市千川水源池

b) 寄贈標本

ウスキモクセイほか植物標本	4点	福田節子氏
荒木英一氏採集三丹地方シダ植物標本	50点	村田 源氏
イワタケ	1点	井上康彦氏
日本産植物標本	29点	村田 源氏
東京都高雄山産シダ植物標本	107点	芹沢俊介氏
日本産物標本	130点	村田 源氏
伊勢市産ヒトツバシケシダ標本	1点	平 竜雄氏
日本産植物標本	101点	村田 源氏
〃	63点	桑島正二氏
宝塚市産シキミ標本	1点	上田俊徳氏
和歌山県花園村産植物標本	9点	山元 晃氏
屋久島産シダ植物標本	3点	生田耕蔵氏
植物標本	2点	西本 裕氏
和歌山県産ケウバメガシ	1点	堀 勝氏
九州産シダ植物標本	5点	筒井貞雄氏
神奈川県産シダ植物標本	4点	守矢淳一氏
ユーカリ (栽培品)	1点	河野 洋氏
栽培植物標本	5点	筒井養之助氏
小豆島産植物	2点	樋出誠詢氏
奈良市産ヒメカンアオイ	1点	谷 幸三氏
日本産植物標本	170点	田川基二・村田源氏
日本産シダ植物標本	105点	中池敏之氏
日本産植物標本	16点	桑島正二氏
日本産菌類標本	2点	上田俊徳氏
日本産植物標本	113点	児玉 務氏
和歌山県産オガタマノキ	1点	堀 勝氏
日本産植物標本	28点	井上康彦氏
台湾産シダ植物	28点	吉年祐一氏
計	983点	

昭和44年度

a) 担当学芸員の資料収集に関する出張

- 4月20日 滋賀県伊吹山
- 4月29日 大阪府河内長野市
- 6月29日 奈良市忍辱山
- 8月7—10日 長野県下伊那郡
- 9月28日 奈良市水上池
- 11月16日—12月25日 フィリピン (別項 p. 15参照)

b) 寄贈標本

神戸市産シダ植物標本 10点
 箕面産ヒカゲワラビ標本 1点
 大阪府産植物標本 2点
 奈良県洞川産ヤマウツボ 1点
 日本産植物標本 95点
 日本産植物標本 70点
 佐賀県・京都府産シダ植物標本 27点
 和歌山県産アツミカンアオイ 1点
 ニオイスミレ(栽培品) 1点
 小豆島産ショウドシマレンギョウ 1点
 カワズカナワラビほかシダ植物標本 2点
 箕面産植物標本 3点
 日本産菌類標本 2点
 福岡県産コウラカナワラビ 1点
 日本産植物標本 3点
 和歌山県産ヤブマオ属 1点
 日本産菌類標本 10点
 長野県産など植物標本 93点
 和歌山県産メヤブソテツ標本 1点
 日本産植物標本 159点
 日本産植物標本 11点
 三重県産ナガバコウラボシ 1点
 大阪府泉南地方産植物標本 35点
 日本産植物標本 75点
 日本産植物標本 85点
 兵庫県産苔類標本 21点
 山口県産シダ植物 7点
 兵庫県産苔類標本 61点
 日本産ミズゴケ科蘚類標本 70点
 日本産植物標本 133点
 日本産植物標本 45点
 日本産シダ植物標本 3点
 兵庫県産苔類標本 30点
 日本産植物標本 8点
 日本産植物標本 41点
 日本産シダ植物標本 300点
 和歌山県産シダ植物標本 2点
 三重県産フクジュソウ標本 1点
 計 1413点

白岩卓己氏
 村田賢三氏
 中西定雄氏
 岡田康稔氏
 桑島正二氏
 児玉 務氏
 井上康彦氏
 乾風 登氏
 村瀬忠義氏
 樋出誠詢氏
 守矢淳一氏
 村田賢三氏
 上田俊穂氏
 筒井貞雄氏
 山元 晃氏
 有馬忠雄氏
 上田俊穂氏
 桑島正二氏
 山元 晃氏
 児玉 務氏
 中島徳一郎氏
 砂子 剛氏
 中西定雄氏
 桑島正二氏
 村田 源氏
 建部恵潤氏
 真崎 博氏
 建部恵潤氏
 中島徳一郎氏
 村田 源氏
 桑島正二氏
 倉田 悟氏
 建部恵潤氏
 中島徳一郎氏
 児玉 務氏
 田川基二氏
 山元 晃氏
 桑島正二氏

ハチョウの各科。日浦勇著。129ページ10図版
 44年度 第2集「日本列島の蝶 第2部」テングチョウ
 ・シジミチョウ・セセリチョウの各科。日浦勇著。

129ページ 10図版

5-1-6 文献交換状況

昭和43年度、昭和44年度の収集
 昭和43年度(43年4月~44年3月)及び昭和44年度
 (44年3月~45年2月6日現在まで)に交換・受贈によ
 り受け入れた雑誌類の冊数、累計冊数は下の表の通りで
 ある。

年 度	受入れ冊数	冊数の累計
昭和43年度	1,843	17,663
昭和44年度	1,866	19,530

5-1-7 当館研究報告の配布状況

当館発行の“大阪市立自然科学博物館研究報告第22号”
 (Bulletin of the Osaka Museum of Natural History
 No. 22) —昭和44年発行—は、723カ所に配布された。
 その内訳は、国内253カ所、国外72カ国458カ所である。
 国外発送分のうち、アメリカ合衆国・イタリア・オース
 トラリア・オーストリア・オランダ・スイス・スウェー
 デン・スペイン・チェコスロバキア・デンマーク・西ド
 イツ・東ドイツ・ニュージーランド・ノルウェー・ハン
 ガリー・フィンランド・フランス・ベルギー・ユーゴス
 ラビア・ルーマニアの20カ国は国立国会図書館国際課を
 経由して送付し、他の諸国へは直送した。なお、国内外
 の配布先のうち254カ所を選んで、研究報告とともに、
 “自然史研究” Vol. 1, No.1~No. 3をも送付した。

5-2 現有資料数(昭和44年2月14日現在)

5-2-1 地学部門

化石標本 4,136
 岩石標本 730
 鉱物標本 1,334
 微化石標本 13,500
 大阪地下の化石標本 956
 計 20,656点

5-2-2 動物学部門

哺乳類・鳥類 約 390点
 両生・爬虫類 約 3,700点
 魚 類 約 2,200点
 貝 類 約 7,200点
 甲殻類 約 1,800点
 その他海産動物 約 1,600点

5-2-3 昆虫学部門

標本数総計 106,423点(日本産74,519, 外国産31,904)
 内訳 日本産昆虫 昭和43年 昭和43年4月から
 3月まで 昭和44年2月まで
 Orthoptera 直翅目 1,566 180

5-1-5 収集資料目録の刊行

当館が暫く開館してから11年を経過し、その間に集積
 した自然史資料がかなりまとまってきたので、収蔵資料
 目録を刊行することにした。当分年一冊、資料が比較的
 よくととのい、研究の終わったグループから順不同に刊行
 する予定である。1・2集はリスト以外に、分類学的・
 形態学的・生物地理学的の考察を加えた。

43年度 第1集「日本列島の蝶 第1部」アゲハチョウ
 ・シロチョウ・マダラチョウ・ジャノメチョウ・タテ

Grylloblattoidea		
コオロギモドキ目	4	0
Blattaria		
ゴキブリ目	68	15
Phasmida		
ナナフシ目	45	5
Mantodea		
カマキリ目	61	24
Dermaptera		
革翅目	108	8
Psocoptera		
チャタテムシ目	54	10
Isoptera		
等翅目	5	0
Odonata		
トンボ目	1,747	209
Heteroptera		
異翅亜目	13,582	541
Homoptera		
同翅亜目	2,557	1,569
Neuroptera		
脈翅目	56	21
Mecoptera		
長翅目	281	56
Rhopalocera		
蝶	10,804	697
Heterocera		
蛾	1,514	11
Coleoptera		
鞘翅目	21,769	3,368
Hymenoptera		
膜翅目	2,732	462
Diptera		
双翅目	2,190	979
水生昆虫 (禿翅目, 毛翅目など)	283	71
その他一般昆虫 (各目)	6,232	635
計	65,658	8,861
計	74,519	

外国産昆虫	昭和43年 3月まで	昭和43年4月から 昭和44年2月まで
蝶	11,897	1,205
蛾	473	2
甲虫	364	0
同翅亜目	0	581
その他	41	2
粉川氏台湾産昆虫コレクション	200	0
南太平洋学術調査収集品	4,700	0
田中竜三氏コレクション (日本産をふくむ)	12,439	0
	30,114	1,790
計	31,904	

5-2-4 植物学部門	
種子・シダ植物おしぼり標本	41,000
セン類標本	2,070
タイ類標本	2,113
地衣類標本	201
海ソウ標本	300
菌類標本	117

6. 調査研究事業

6-1 研究体制

当館の研究スタッフは、昭和43年度末に波田重熙学芸員が高知大学へ転出、かわりに両角芳郎が地学担当の学芸員として就任した以外に変動はない。学芸員の増員をつねに要望しているが、44年度中に実現しなかった。

スタッフ

千地万造 (CHIJI Manzo) 地学
 波田重熙 (HADA Shigeki) 地学 (43年度末退官)
 日浦 勇 (HIURA Isamu) 昆虫学
 宮武頼夫 (MIYATAKE Yorio) 昆虫学
 柴田保彦 (SHIBATA Yasuhiko) 動物学
 瀬戸 剛 (SETO Ko) 植物学

visiting students

紺田 功 (KONDA Isao) 地学 (県立奈良高校)
 谷 幸三 (TANI Kōzō) 昆虫学 (桜井女子高校)
 両角芳郎 (MOROZUMI Yoshiro)

[略歴]

昭和44年3月：京都大学理学部地質学鉱物学科卒
 昭和44年4月：当館学芸員補

[テーマ]

A：紀伊半島四万十累帯の層序学的研究

仏像一条川構造線を境にして秩父累帯の南に分布する四万十累層群のうちでも、北半分の日高川層群は長い間詳しい調査も行われず、時代未詳中生界として扱われてきた。しかしながら最近、化石が発見されるなど調査が進んできている。そこで、日高川層群の地質図を作成

し、層序を明らかにすると共に、発見されるイノセラムスの化石による地質時代の検討、更には秩父累帯との対比を行っていきたい。

B：瀬戸内地域新第三系の層序ならびに貝化石群集

西日本の各地に点在する古瀬戸内海の堆積物の層序学的研究と、そこから産出する貝化石の分類学的、古生態学的研究を行っていく。

6-2 昭和43・44年度の総合調査

当館では学芸スタッフの層が薄いために、各学芸員は資料収集・展示・普及活動等にエネルギーをさかれ、個人研究テーマを持続するのが精いっぱい、という現状である。そのため、各部門が協力・分担して行う総合的な調査事業は、43年度には実施できなかった。

44年度においては、「瀬戸内地域の自然発達史の総合的研究」を実質的に当館で組織し、学芸員が分担して研究を開始した。また、大阪自然科学研究会の依頼によって、フィリピン群島へ自然史調査及び資料収集を目的とする隊を派遣した。個人的な海外出張は従来も2、3あったが、館全体としてとりくむ本格的な海外調査は、1958年度のメラネシア学術調査以来、10年ぶりのことであった。

i) 瀬戸内地域の自然発達史の総合的研究

・研究の目的

新第三紀初頭以後の各地質時代における古瀬戸内地域およびそれに関連ある地域の古生物相・古環境の復原、並に現在の生物相を調査し、これら両者の関連を明らか

にすることによって、西日本中軸部の自然史を総合的に把握することを目的とする。

○44年度研究課題と研究分担者

①北陸～瀬戸内地域の新世代層序の絶対年代の決定と、浮游性有孔虫による生層序区分——千地万造・池辺展生（大阪市立大学理学部）

②津山盆地第三紀化石群集の組成と古生態学的研究——両角芳郎

③兵庫県武庫川流域の植物相の調査——児玉務（服部植物研究所）

④東部瀬戸内海島嶼の両生・爬虫類、とくにタワヤモリの分布域の調査——柴田保彦

⑤古瀬戸内型分布をする水生昆虫、とくに水生半翅類の生物地理学的研究——日浦勇

○研究代表者 千地万造

○施行主体 日本博物館協会

なお成果は目下まとめ中である。

ii) フィリピン群島自然史調査

——フィリピン国立博物館の協力による——

東南アジアの亜熱帯・熱帯域は、日本人のふるさととして、また日本生物相の源流として、日本人研究者によるその自然史の解明がのぞまれる地域である。当館ではこうした問題意識をもって、資料収集目標の1つとして東南アジア資料の豊富なコレクションを目指してきたし、又各学芸員の個人研究には、つねに東南アジア資料の検討を必要としてきた。フィリピン群島は東南アジアの一角にあって、大陸の外側の島国であるという点で、東北アジアにおける日本列島と共通した性格をもっている。また黒潮や台風などが両群島をむすびつける働きをしているために、フィリピンの自然史は日本と重要なかわりをもっている。昭和45年度の特別展に「東南アジアの自然」展を予定していたこともあって、大阪自然科学研究会からの派遣申出は、当館として、誠に時をえたものであった。

フィリピンは対日感情が悪いと伝えられ、まは当館にとって全く未経験の国であるため、まず千地が予備調査に出かけ、①学術調査隊の派遣に関する一般的情况の把握、②調査・資料収集の地域の設定、③当該地域における調査隊の受入に関する諸条件の調査を行った（6月29日～7月12日）。その結果、フィリピン国立博物館（マニラ）と当館との共同事業とし、ミンダナオについてはADECOR社（Aguinaldo Development Corporation）に、パラワンについては国立博物館に、ルソンについてはフィリピン国立大学農学部、に、宿泊・輸送の便宜をはかってもらった。

○共同調査に関する National Museum of the Philip-pines とのとりきめ

①現地での世話は比博が行う

②資料は両館で等分する

③学術成果の公表は両館学芸員の共著で行う

○研究テーマ

●パナイ島イロイロ堆積盆地の新世代微化石層序（千地）

●フィリピン群島蝶相の生物地理学的研究（日浦）

●フィリピン産キジラミ科の分類と食性調査（宮武）

●フィリピン産シダ植物の分類学的・形態学的研究（瀬戸）

○資料収集目標

●半翅類・蜻蛉類・直翅類・鞘翅類等従来日本にはほとんど標本のないフィリピン産大型昆虫の収集（日浦・宮武）

●博物館資料の基礎としての熱帯植物主要種の収集（瀬戸）

○隊編成

A：予備調査及び地学隊

千地万造

Silvio M.Lopez（比博研究員）

B：本隊

昆虫班 日浦勇

宮武頼夫

Romualdo E.ALAGAR（比博研究員）

植物班 瀬戸剛

Hermes G. GUTIEREZ（比博主任研究員）

Ernesto J. REYNOSO（〃 助手）

Francisco R. de la CRUZ（〃 助手）

○日程

地学隊 7月6日 マニラ発→パナイ島イロイロ市

7月7・8日 パナイ島西部 Tanian 川流域の新第三系の試料収集

7月9・10日 パナイ島中部サンタバーバラ市周辺の新第三系・第四系の試料収集

7月11日 イロイロ発→マニラ帰着

本 隊

11月16日 大阪→マニラ

11月17・18日 比博にて打合せ・所蔵標本閲覧・必需品購入・関係方面挨拶回り

11月19日 午前中中市内で採集、午後マニラ→ミンダナオ島ダバオ

11月20日 Lipadas 川で採集、登頂ルートの下調べ

11月21日 ジープのチャーター・ガイドの契約・用具の調達。別送荷物引取りについて通関業者と接触

11月22日 Upper Catigan にて採集

11月23日 Upper Bayabas 川にて採集

11月24日 通関業者と打合せ、食料購入、Binagao Beach にて採集

11月25日 Sibulan Beach にて採集

- 11月26日 ジープ2台にてダバオ出発, Capatagan 着
 11月27日 Capatagan にて採集, 人夫の契約, 挨拶
 11月28日 総計20名の部隊にて採集しながら行軍,
 Capatagan→Kidalan→Lower Varolin 川→
 Todaya→Upper Varolin 川。野営
 11月29日 植物班は Upper Varolin から Maragusen
 まで登山採集野営。昆虫班は Upper Varolin にと
 どり採集
 11月30日 植物班は Maragusen より Mt. Apo. に
 登頂して Upper Varolin に下り, 昆虫班と合流。
 12月1日 Varolin から Capatagan まで行軍・採集
 12月2日 午前中 Capatagan にて採集。午後行軍し
 て深夜ダバオ帰着
 12月3日 採集品整理
 12月4日 Tungkalan にて採集
 12月5日 ダバオ→マニラ帰着
 12月6日 マニラ→パラワン島プエルトプリンセサ
 12月7日 プエルトプリンセサ→アボアボ
 12月8日 アボアボ→ケソン。ケソンにて採集
 12月9日 ケソン南方で採集
 12月10日 ケソン西方で採集
 12月11日 ケソン東方で採集
 12月12日 ケソン西方で採集
 12月13日 ケソン西方で採集
 12月14日 ケソン→プエルトプリンセサ
 12月15日 午前中 Tagbuos にて採集, 午後プエル
 トプリンセサ→マニラ帰着
 12月16日 マニラ→ロスバニョス。マキリン山麓で
 採集
 12月17日 マキリン山中腹採集
 12月18日 Alligator 湖畔採集
 12月19日 マキリン山中腹採集
 12月20日 ケソン州 Atimonan のケソン国立森林公
 園にて採集
 12月21日 マキリン山採集
 12月22日 午前中フィリピン大学所蔵標本閲覧, 午後
 ロスバニョス→マニラ帰着
 12月23日 比博にて採集品整理
 12月24日 標本梱包
 12月25日 マニラ→大阪帰国
 余暇のまったくない強行スケジュールでありすぎた。
 ○主なる成果(目下整理中であるため, くわしい数は不明)
1. 採集昆虫標本

蝶——2,749点	}	計 約20,000点
トンボ——575点		
キジラミ——255点		
その他昆虫——約15,000点		

2. 採集植物標本 約 2,000点
3. 各自の研究目的が達せられた。
4. 熱帯の生物的自然について体験を得, 従来書物のみから得ていた知識を補正充実することができた
5. 昭和45年度特別展開催について若干の準備ができた。
6. フィリピン国立博物館, およびフィリピン国立大学農学部との交友をふかめ, 今後の資料交換, 共同研究の道を招くことができた。

○成果の公表

正式の学術報告は, 主として Bulletin of the Osaka Museum of Natural History に逐次英文で発表する。解説記事は大阪自然科学研究会機関誌 Nature study に日本語で連載中である。その他各種の研究集会でスライド等を用いて発表する。すでに日本シダの会関西談話会例会, 植物分類地理学会例会, 関西トンボ談話会例会, 大阪自然科学研究会総会で講演した。45年10月の「東南アジアの自然展」では成果のすべてを出陳する予定である

6-3 昭和43・44年度個別調査研究事業

千地万造(地学)

○昭和43年度

- i) 総合研究「日本海域の地学的特性に関する研究」に分担者として参加(昨年度より継続)

底質中の有孔虫群集を解析。

- ii) 大阪市深層ボーリングによる地下地質構造並に層序の研究

大阪市立大学池辺展生教授・竹中準之助講師と共同研究。本年度は特に OD-7, OD-8, OD-9 の3本のボーリングと, すでに調査済みの OD-1, OD-2 との比較・対比を行うと共に, OD-1 の試料中の化石有孔虫群集について調査した。

(大阪市立自然科学博物館研究報告 No. 21, p. 51-61)

- iii) 日本の最新世有孔虫群集の研究

- (a) 本年度は北海道石狩郡当別町に分布する獅子内層の化石有孔虫群集を採集・調査した。

(自然史研究 Vol. 1, No. 3, p. 21-24)

- (b) 化石有孔虫群からみた Plio-Pleistocene Boundary これまで諸外国で行われた研究 および国内の結果を総括して発表した。

(第四紀 No. 12, p. 11-24)

○昭和44年度

- i) 日本の新第三紀の生層序区分と絶対年代に関する共同研究

大阪市立大学池辺展生教授との共同研究を行い総括的な報告を行った。

(自然史研究 Vol. 1, No. 4, p. 25-34)

- ii) 日本海域における有孔虫群集の分布

奈良高校教諭紺田功と共同研究を行い奥尻島周辺の

深度分布を明らかにした。

(大阪市立自然科学博物館研究報告 No. 23, 印刷中)

iii) 大阪府岸和田地区の地盤沈下に関する研究

大阪市立大学池辺展生教授・竹中準之助講師と共同で実施中。

iv) フィリピン・パナイ島の第三系および第四系の化石有孔虫群集の研究

6月29日から7月12日までフィリピンに出張し、現地において資料収集を行い現在研究中。(フィリピン国立博物館シルビオ・M・ロペス氏と共同)

v) 近畿地方における旧ゾウ化石の層準と分布に関する研究

大阪市立大学池辺展生教授、京都大学石田志朗助教授と共同で、奈良県北葛城郡馬見丘陵の地質と産出化石を調査した。

(名古屋大学竹原平一教授退官記念論文集, 印刷中)

波田重熙(地学)

○昭和43年度

- i) 大阪市立大学第5次東南アジア学術調査隊に、隊員として参加。7月15—9月20日まで、マレーシア・タイ・カンボジアの各地で地質学的調査を行い、岩石・化石等の資料を収集した。とくにボルネオ北端サバ州のキナバル山の構造地質学的調査に重点をおいて研究した。

両角芳郎(地学)

○昭和44年度

i) 四万十帯と秩父帯の関係

卒業研究の継続として和歌山県有田郡広川町・御坊市などで地質調査を行い、仏像構造線の位置について検討すると共に仏像構造線付近の日高川層群の層序をまとめた。

(大阪市立自然科学博物館研究報告 No. 23, 印刷中)

ii) イノセラムスの分類学的研究

日高川層群はいままで、有効な化石が発見されないために地質時代がはっきりしていなかったが、(i)の調査中にイノセラムスが発見された。イノセラムスは白亜紀の重要な示準化石であるのでこれについて九州大学松本達郎教授のご教示を受けながら調べた。

(大阪市立自然科学博物館研究報告 No. 23, 印刷中)

iii) 総合研究「瀬戸内地域の自然発達史の総合的研究」の分担者として、岡山県津山盆地の新第三紀貝化石群集について調べた。この研究は今後もつづけていく予定である。

柴田保彦(動物学)

○昭和43年度

i) 五島列島福江島・対馬の動物相調査

福江島へは43年5月に渡島し、生物地理学の立場から主として両生爬虫類相を調べた。対馬へは、国立科

学博物館の「日本列島の自然史科学的総合研究」の委嘱研究として同年6月に渡島し同様のことを調べた。

○昭和44年度

i) 四国石鎚山の調査

山岳地帯での両生爬虫類の垂直分布と食物連鎖を調べるため、44年8月に石鎚山を調査した。これは、44年度文部省特定研究「陸上脊椎動物群集の構造の比較とその保護に関する研究(JIBP—CTS)」の研究分担者として行った。

宮武頼夫(昆虫学)

○昭和43年度

- i) 日本産キジラミの分類と生活史の調査—近畿地方の各地を28回にわたって調査、資料を収集し分類するとともに、生活史の究明に努めた。前年記載発表したエノキカイガラキジラミの生活史をほぼ1年間で解明し、間もなく発表できる段階に至っている。7月には愛媛県の各地を調査し分布の新知見も得られた。従来からほぼ調べがっていたツゲモドキキジラミやヤブニッケイトガリキジラミの幼期の形態や生活史を Bulletin No. 22に発表、又、馬場金太郎氏のコレクションを主とした新潟県のキジラミを同じく Bulletin No. 22でまとめ、43種を記録した。

タブノキを加害するキジラミを *Trioza machilicola* として新種の記載をし、生活史や幼期の形態もあわせて四国昆虫学会会報に発表した。

IBPの担当者からの依頼で御岳のキジラミの同定も行った。その他、国外の博物館から依頼のあったニューギニア、ボルネオ、フィリピン、台湾、香港などの資料は研究続行中であり、まだまとめるに至っていない。

ii) 近畿地方の同翅亜目の分布調査—キジラミの調査にでかけた折に努めて資料を収集しているが、まだまとめるにいたっていない。近畿地方のセミの脱殻は一通り集めることができた。

iii) 奈良春日山原生林の昆虫相調査(日浦の項参照)

○昭和44年度

- i) 日本産キジラミの分類と生活史の調査—近畿地方の調査はのべ13回、夏には山陰地方へ出張調査した。

Togepssylla matsumurana Kuwayama の再記載と生活史・幼期の形態などをまとめ、Bulletin No. 23に投稿中。6月にエノキカイガラキジラミの生活史について、日本昆虫学会近畿支部大会で講演した。

外国産のキジラミは研究続行中である。

ii) フィリピン群島産キジラミの分類・生態の研究

日浦勇(昆虫学)

○昭和43年度

- i) 周日本海地域の昆虫分布とその成立過程の研究

金沢大学紮野義夫教授を研究代表者とする「日本海の地学的特性に関する総合研究」に研究分担者として42年度

より継続参加。8月16—25日の間、対馬に渡島して朝鮮海峡問題にかかわる資料を収集。京都大学亀井節夫教授のおすすめによって、10月日本学術会議第四紀研究連絡委員会主催の「第四紀学における最近の進歩」に関するシンポジウムにおいて「第四紀と生物地理」と題して講演

ii) 日本産チョウの分布。i) と関連する主題で、過去11年間に当館で収集した蝶標本を再検討し、アゲハチョウ科、シロチョウ科、マダラチョウ科、ジャノメチョウ科、タテハチョウ科について若干の考察を加え、収蔵資料目録の第1集として刊行した。

iii) 奈良春日山原生林の昆虫相調査。天然記念物として保護されているはずの春日山原生林では、指定対象の第1であるルーミスジミが絶滅したらしいので、奈良県観光課が調査方を奈良市の谷幸三氏（当館の研究生）に依頼した。日浦・宮武は照葉樹林の典型としての同原生林の調査の重要性を考えて谷氏に協力、43年度中に計8回の調査を行った。成果は未公表。

iv) ツシマヤマネコの食性調査。大阪市立大学探検部ヤマネコ班の生態調査は武庫川女子大学野生動物研究会にひきつがれ、食性を糞の検査から推定する段階へ進んだ。ヤマネコ糞には昆虫がかなり見られるので、指導教官朝日稔教授の依頼によって同定を指導、昆虫の意外な天敵としてヤマネコ、あわせて対馬の昆虫相の解明を目的に調査を行った。これは44年度も継続し、成果の1部は井上朋子氏の卒業論文等で発表された。

・昭和44年度

i) 周日本海地域の昆虫分布とその成立過程の研究
本年度は五島列島の昆虫を材料に、いわゆる「大陸系」又は「鮮満系」とよばれる西日本西偏型分布をする種について考察した。未発表。

ii) 日本産チョウの分布。前年にひきつづき収蔵資料目録の第2集を刊行、テングチョウ科・シジミチョウ科・セセリチョウ科について若干の考察を行った。その他東アジアのウラナミジャノメ群の分類地理をまとめ、国立科学博物館専報に投稿。

iii) モンシロチョウ属 *Pieris* の分布と食性の調査、能勢初谷を中心に微細なチョウと食草の分布をしらべ飼育によって確認した。未発表。

iv) 水生半翅類を中心とする水生昆虫の分布。北海道天塩・留萌地方および山陽地方で採集を行い、種の分布型の把握につとめた。後者は「瀬戸内地域の自然発達史の総合研究」の一環として行ったものである。未発表。

v) フィリピン群島蝶相の生物地理および日本との関連の研究

瀬戸剛（植物学）

・昭和43年度

i) 近畿地方シダ植物の分類・地理学的研究（継続）

ii) 日本産カンアオイ属植物の資料調査。日浦学芸員

に協力して当館所蔵文献を中心に日本産各種の分布記録を集成し自然史研究 Vol. 1, No. 2 に発表。

iii) イズミカンアオイの研究 大阪府和泉山脈に分布するカンアオイ近似の1種につきその性質を究明し、分布を調査した。

iv) 新しく備えた設備

(i) 栽培植物自動灌水装置 シダ類その他の研究材料および良い標本を得るためにある期間栽培の必要な植物の小栽培場を館内2階ベランダに設け、灌水の人手を省くため、簡単な自動灌水装置を新設した。鉄パイプの骨組に、噴霧ノズル（オレゴンビーノズル、75cm間隔）をつけたビニールパイプをとりつけ、水源（水道をそのまま利用）との間にタイマーと連動する電磁弁を装置したものである。鉄パイプの骨組には日よけのすだれをとりつけた。

(ii) 冬期の栽培、とくにシダ植物の前葉体の幼植物の培養のため、小型室内温室（竹原化成ハイガーデン既製品をそのまま使用）1台を購入した。

・昭和44年度

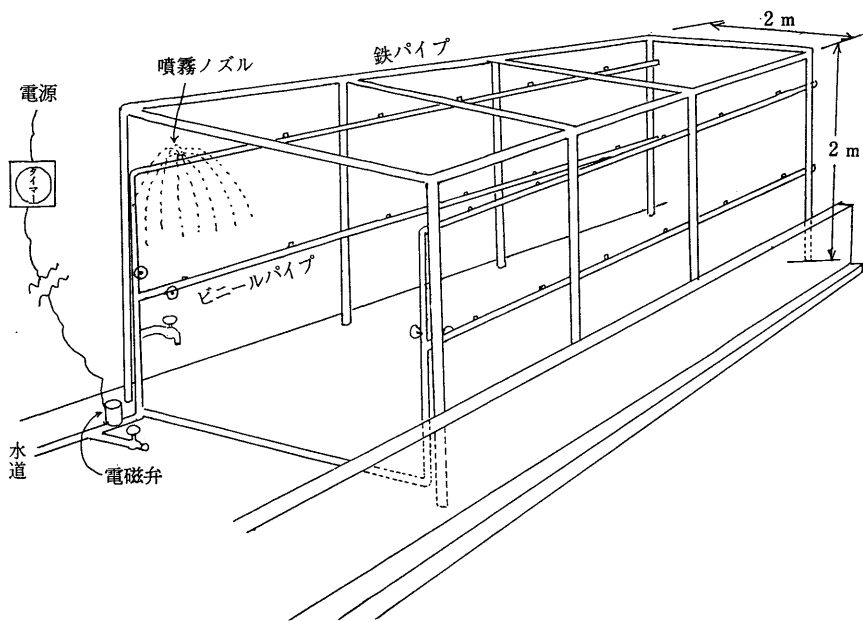
i) フィリピンシダ植物の分類学的研究（別項参照）

6-4 学芸員ゼミナール

学芸員の相互理解・相互啓発のために行った。

昭和43年4月以降のテーマは下記の通りである。

- 4月3日 *Pieris*（モンシロチョウ）属の系統と分布の問題（日浦）
- 4月10日 アブラムシの life cycle について（宮武）
- 4月17日 西南日本における後期中生代の火成活動（波田）
- 5月2日 食肉類動物の系統と進化の紹介（柴田）
- 5月8日 ギフチョウ属の歴史（日浦）
- 5月22日 「森林保護の生態学的基礎」の紹介（宮武）
- 6月5日 Zimmerman の「Telome theory」の紹介（瀬戸）
- 6月26日 黒瀬川構造帯について（波田）
- 7月3日 孤状列島の話（波田）
- 7月11日 Mecoptera の系統と進化（日浦）
- 10月9日 Homoptera における発音—特にキジラミ科の発音機構に関して（宮武）
- 10月16日 日本の植物及び蝶の分布におよぼした第四紀の役割（日浦）
- 11月6日 東南アジア（ボルネオ・シンガポール・マレー・タイ・カンボジア）旅行談（波田）
- 11月27日 チューリップの dropper について（瀬戸）
- 12月4日 Numerical taxonomy の紹介（柴田）
- 12月18日 *Leptynoptera* 属の変異とキジラミの higher category の問題（宮武）
- 1月8日 原始的な被子植物の子房（瀬戸）
- 3月23日 地球のおいたち（波田）



栽培植物自動灌水装置

6-5 研究業績一覧

(Contributions from the Osaka Museum of Natural History)

業績番号 研究者 “表題”, 発表機関, 巻号 : 頁 (発表年)

128. MIYATAKE, Y. “A new Japanese species of *Trioza* from *Machilus thunbergii*, with descriptions of the immature stages and notes on biology”, *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, 10(1): 1—10
129. 日浦勇・桜井正臣 “大阪府能勢地方におけるモンシロチョウ属 *Pieris* 3種の生態、とくに種間関係について、第2報 : 1961年の調査結果”, *自然史研究*, 1(1): 1—5
130. 日浦勇・瀬戸剛 “日本産カンアオイの分布記録”, *自然史研究*, 1(2): 7—19
131. 千地万造・小久保公司 “獅子内層の有孔虫化石”, *自然史研究*, 1(3): 21—24
132. MIYATAKE, Y. “Notes on the immature stages of *Insnesia drypetes* Y. MIYATAKE from the Yaeyama Group, the Ryukyus (Hemiptera; Psyllidae)”, *Bull. Osaka Mus. Nat. Hist.*, 22: 15—18
133. MIYATAKE, Y. “On the life history and the immature stages of *Trioza cinnamomi* (BOSELLI), with the redescription of adult (Hemiptera: Psyllidae)”, *Ditto*, 22: 19—30
134. 児玉務 “近畿地方タイ類目録V”, *Ditto*, 22: 31—62
135. MIYATAKE, Y. “On the Psyllidae from Niigata Prefecture, North Honshu, Japan I (Hemiptera)”, *Ditto*, 22: 63—83
136. KONDA, I. “Foraminiferal faunule from the Akugawa shell Bed, Kii Peninsula, Central

Japan—Studies on Japanese Pleistocene Foraminifera VI”, *Ditto*, 22: 85—96

137. 千地万造 “*Ammonia beccarii* グループによる内湾性堆積物の堆積環境推定の試み”, *日本地質学会第76年学術大会シンポジウム「海岸平野」資料*, 75—81
138. IKEBE, N. & M. CHIJI “Neogene Biostratigraphy and Geochronology in Japan”, *Shizenshi-Kenkyû*, 1(4): 25—34
139. 日浦勇 “日本列島の蝶 第1部”, *大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第1集*, 10図版, 120ページ
140. 日浦勇 “日本列島の蝶 第2部”, *同上第2集 (印刷中)*
141. CHIJI, M. and ARANETA et al. “Natural History Survey of the Philippines by the Osaka Museum of Natural History in co-operation with the National Museum of the Philippines 1969”, *Bull. Osaka Mus. Nat. Hist.*, 23: (印刷中)
142. 池辺展生・石田志朗・千地万造 “奈良県北葛城郡馬見丘陵から *Stegodon* の発見”, *竹原平一教授記念論文集*, (印刷中)
143. 日浦勇 “対馬をめぐるウラナミジャノメ群の分類地理”, *国立科学博物館専報*, 3 (印刷中)
144. MIYATAKE, Y. “Some taxonomical and biological notes on *Togepsylla matsumurana* KUWAYAMA, Jr. (Hemiptera: Psyllidae)”, *Bull. Osaka Mus. Nat. Hist.*, 23 (印刷中)
145. 両角芳郎 “紀伊由良東方の地質——特に仏像構造線付近の日高川層群について”, *Ditto*, 23 (印刷中)
146. MOROZUMI, Y. Upper Cretaceous *Inoceramus* from the Shimanto Belt of the Kii Peninsula *Ditto*, 23 (印刷中)

7. 展 覧 事 業

7-1 常設展

・昭和43年度

第1展示室 化石の展示を主にするため、従来あわせて展示していた岩石・鉱物を全部第4展示室へ移した。

第2展示室 将来、この部屋を植物及び脊椎動物の展示を主としてゆくため、その第1歩として、第4展示室の鳥関係の展示を全部第2展示室へ移した。海藻及び貝塚の貝などの展示は引きあげた。

第3展示室 夏まで続けていた「甲虫展」をそのまま残して一般陳列に組み入れた。夏にはセミの展示を増やし日本（琉球列島を含む）及び外国のセミの標本を展示すると共に、大阪付近のセミの分布などを示し、大英博物館から借りた日本産セミのタイプ標本のカラー写真なども展示した。秋には、鳴く虫の標本の展示及び鳴く虫の生態などを解説した。

第4展示室 従来あった鳥関係の展示を全部第2展示室に移し、第2展示室から移した岩石・鉱物の展示を大はばに充実させた。

第2・4展示室は昭和43年度特別展の準備のため、43年12月末をもって閉鎖した。

1階から2階にいたる階段ごいに、オリエンテーションのための組写真を陳列することになり、6月21日に完

成した。これは「わたしたちは、どこから、きたのか？

どこにいるのか？ そして どこへ ゆくのか？」というタイトルをつけ、人類の歴史——それと自然とのかわりについて展示室に入る前に観客にまず問題意識をもたせよう、というねらいである。

・昭和44年度

第1展示室 大阪市内より掘り出される沖積層の動物化石（貝・カニ・魚など）の展示を大はばに充実させた。マチカネワニ頭部のX線写真を出した。

第2・3展示室 動物部分から無脊椎動物を分離し、これを第3展示室へうつして昆虫と共に系統分類の立場からも見られるようにした。節足動物の系統を示すパネルを展示した。昆虫部分は量を縮小した。第2展示室の植物部分を拡げ、おしば標本などもならべた。

第4展示室 鉱物展を機会に全面的に鉱物の展示がえを行い、内容を充実させた。

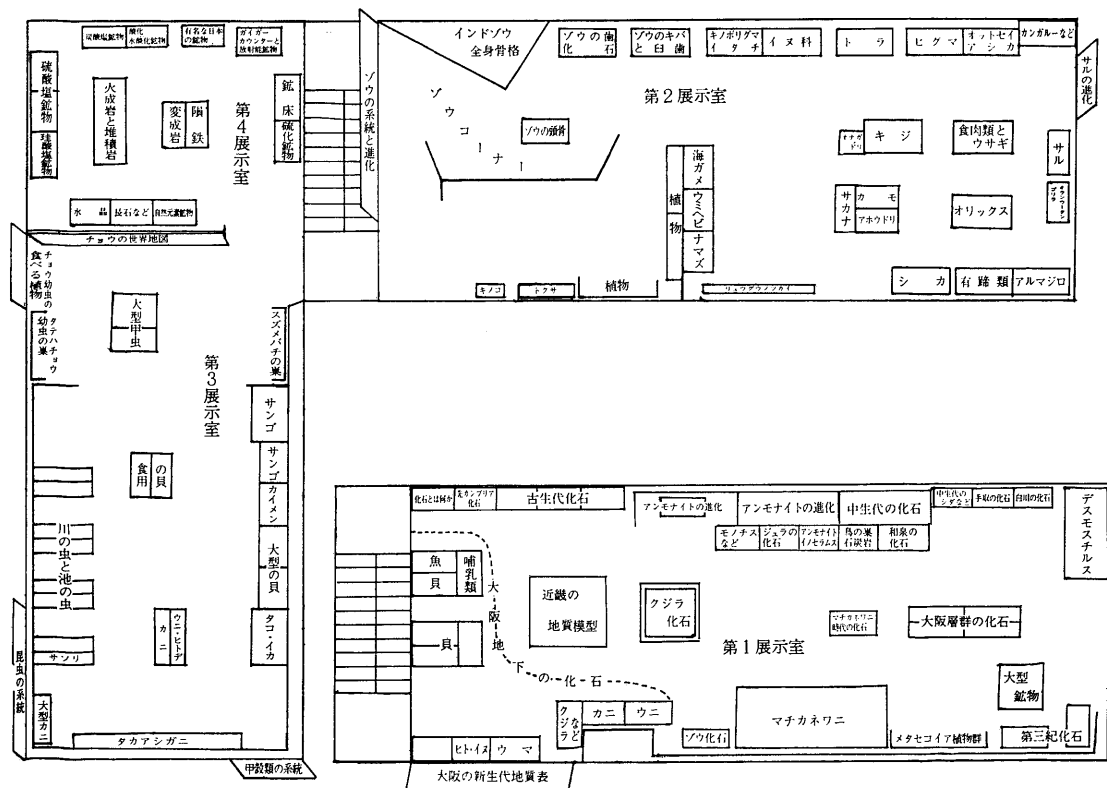
また、第1・2展示室に机といすをならべ休めるようにした。

7-2 特別陳列

・昭和43年度

「甲虫展」

特別展「貝の世界」以後、カミキリムシ・コガネムシ



昭和44年度の常設展配置図

のなかまを主体に甲虫の分類展示を拡充していたが、その後5月はじめ頃までに完成し7月まで「甲虫展」として展示した。外国産甲虫の標本も多数加え、日本産甲虫の生態写真も展示した。展示した甲虫のグループは以下の通りである。ハンミョウ・ゴミムシ・ゲンゴロウ・ミズスマシ・ガムシ・シデムシ・ハネカクシ・クワガタ・コガネ類・タマムシ・コメツキ・ホタル・テントウムシ・ゴミムシダマシ・ハナノミ・カミキリモドキ・カミキリ・ハムシ・ゾウムシ等、終了後も一般展示として秋まで残した。

○昭和44年度

川の虫、池の虫—水棲昆虫の生態—

昭和44年7月—8月、淡水と昆虫の生活との結びつきを中心に、水棲昆虫の分類展示を行った。ゲンゴロウ・アメンボ・トンボなどは、人間の生活環境との関連において、入館者に多くのことを考えさせた。終了後は一般陳列に組み入れた。

ネパール・ヒマラヤの自然展

昭和44年6月—7月。登山家・木沢清司・岩佐孝男両氏は1968年にネパールで採集した蝶などを当館に寄贈されたが、これを機会に山や人の写真、民俗資料、岩石や化石など両氏の資料を中心に陳列を行った。当館からも昆虫などの補助的な資料を出し、日本の生物相とどのような関連のある地域かを示した。

大阪の地下に眠る化石展

昭和44年7月1日から8月31日まで。終了後は一般展示に組み入れた。地下鉄工事、ビル工事で掘りだされる大阪市内産の化石をまとめて展示し、大阪の自然環境と海の動物のうつりかわりを解説した。道路のアスファルト・戦災の焼カワラから導入を行い、しだいに犬や馬・人など昔の生物が土中にうもれていること、もっと深く掘れば、海の動物化石を含む地層があることを示し、現在とその時代との時間的断絶感のないようにした。貝化石は莫大な量と種類があるので、ごく主要なものにとどめ、その他のクジラ・サカナ・カニ・ウニ・ゴカイなどの化石で時間的な生物相の変遷を強調した。

7-3 大阪市立婦人会館での展示

婦人会館1階ロビーに当館のケースを1つ置き、2ヶ月又は3カ月ごとにテーマを変えて展示を行っている。昭和43年5月以降は次の通り、5—8月、海藻。9月—11月、秋の鳴く虫。12—4月、モルフォチョウ。5—6月、ナウマンゾウの歯化石など。7—8月、クワガタムシ・カブトムシ。9—10月、秋の鳴く虫。11—1月、白川の植物化石。2月、地衣類。以後はサンゴなどを予定。

7-4 特別展

7-4-1 世界の蝶・日本の蝶展（第6回特別展）

趣旨：当館が11年間に収集したチョウの標本は、外国産・日本産あわせて2万点を越すばう大な量となり、日本

でも有数のコレクションになった。これは大阪市民共有の文化財産であって、常に館の展示室に陳列して供覧するのがたてまえであろうし、又その声もしばしばきかれるところである。しかし蝶の標本は明るい場所に長時間おくと色があせ、もろくなってしまう危険性がある。従って永遠にこの文化財をのこしてゆくためには、大々的な公開を5—6年に一度に限定しなくてはならない。当館では昭和37年度にジャクレー・コレクションの初公開以来蝶展を行なっていないし、阪神デパートで開催した蝶展も短期間であったため、開催をのぞむ声が高く今回の催しの運びとなったものである。

今回は従前の動物区系による展示を止め、チョウの分布が食草である植物の分布と密接なつながりをもつところから植物区系に従って配列した。日本のチョウが世界のチョウの中のどういう部分をしめているかを明確にするために、近隣地域のチョウと比較できるようにした。期間：昭和44年3月1日（土）～4月27日（日）

場所：博物館3階第2展示室西半分、第3展示室及び第4展示室を使用した。

出陳内容：テーマは平面図参照

1. 外国産・日本産蝶標本約16,000点。内訳は次の通り

ヨーロッパ・シベリア・地中海の蝶	13箱
アフリカ・マダガスカル	19箱
インド・セイロンの蝶	3箱
日華区系の蝶	48箱
ネパールの蝶	3箱
東南アジアの蝶	60箱
カンボジアの蝶	10箱
マレー群島の蝶	37箱
オーストラリアの蝶	3箱
ニューカレドニア・メラネシアの蝶	11箱
北アメリカの蝶	16箱
中央アメリカの蝶	18箱
南アメリカの蝶	39箱
モルフォチョウ	27箱
トリバネチョウ	6箱
蝶の異常型・ミミクリー・変異等	20箱
日本の蝶	150箱
外国の蝶	33箱

- | | |
|---|------|
| 計 | 516箱 |
|---|------|
2. グツドの「世界の植物区系」地図 (5.0×2.4m)
 3. 写真(蝶の生態写真・棲息地の環境写真等) 101点
 4. 解説パネル 35点
 5. 蝶の食草のおし葉標本 15点
 6. 食草の生きたもの80鉢 (竹原化成工業KKから借用のハイガーデンに収容して展示)
 7. E. A. SEGUY の「Papillons」(蝶の版画) 一岩田五郎左衛門氏から借用。

8. A. SEITZ の「Gross-Schmetterlingen der Erde」(アメリカ篇・アフリカ篇等)一岩田五郎左衛門氏から借用。

なお、日本の蝶の展示のスペースが小さすぎて、当初予定していた箱数を一度に陳列できなくなり、3月はアゲハチョウ科の一部、シロチョウ科(約半分)、マダラチョウ科、ジャノメチョウ科、タテハチョウ科で開始し、4月1日からこれらの大部分をしまい、シロチョウ科の残り、アゲハチョウ科の大部分、シジミチョウ科、セセリチョウ科を出品した。

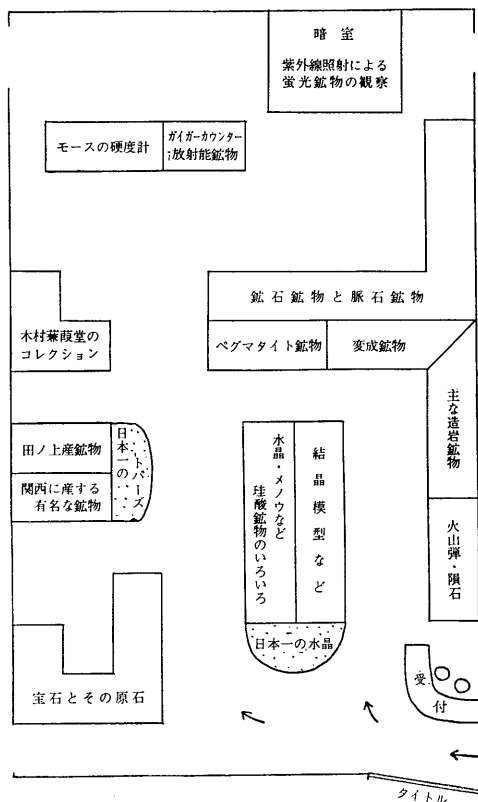
入館者数：30,278名(中学生以下16,006名、高校生以上14,272名)。

パンフレット：「世界の蝶・日本の蝶」24ページを刊行した。記念スタンプ及び記念絵ハガキ(外国産蝶4種カラー印刷)も作成した。

評価：植物との結びつきをテーマとしたが、テーマがぼやけて強い問題意識を印象づけるまでに至らず、資料そのものもつ魅力で見せる展示に終わってしまった。標本箱や展示スペースの不足からかなり見苦しい部分もあった。またパネル製作費に制限があるので十分な説明が行えなかった。

7-4-2 暮らしの中に生きる鉱物展

昭和44年8月6日から12日まで、阪神百貨店8階催場で行なわれた。大阪読売新聞社が共催。鉱物の概念を判りやすく説明することが主眼であった。内容：地球を構成する物質—隕鉄・テクタイト・火山弾など。造岩鉱物



特別展「鉱物展」(於：阪神)見取図

—石英・准長石・長石その他、ベグマタイト—電気石・ジルコン・ホタル石・トパーズなど、スカルン—ベスブ石など。気成・熱水・風化(二次成生)鉱物。結晶形。宝石と原石。螢光鉱物。放射能鉱物。硬度計。関西に特産する鉱物。木村兼葎堂旧蔵の鉱物標本。当館で16頁の解説パンフレットを作成した。

7-5 当館協力の展示(2件)

7-5-1 月の石特別展

昭和44年12月9日から13日まで、大阪市立博物館において、大阪市主催で行なわれた。当館は電気科学館天文部門と展示を担当し全体的な展示計画、実施を行なった。標本としては、地球外よりやってきた物体として、隕鉄や各種のテクタイト・宇宙塵を展示した。ハンレイ岩の薄片を拡大投影機で見せ、月の石の拡大顕微鏡写真と対応させた。単に月の石を見せるにとどめず、科学の立場での理解をしてもらえるよう計画したが、主として入場者多数のため、この点は十分な効果があがらなかった。

7-5-2 かくれた郷土の博物学者 堀田竜之助展

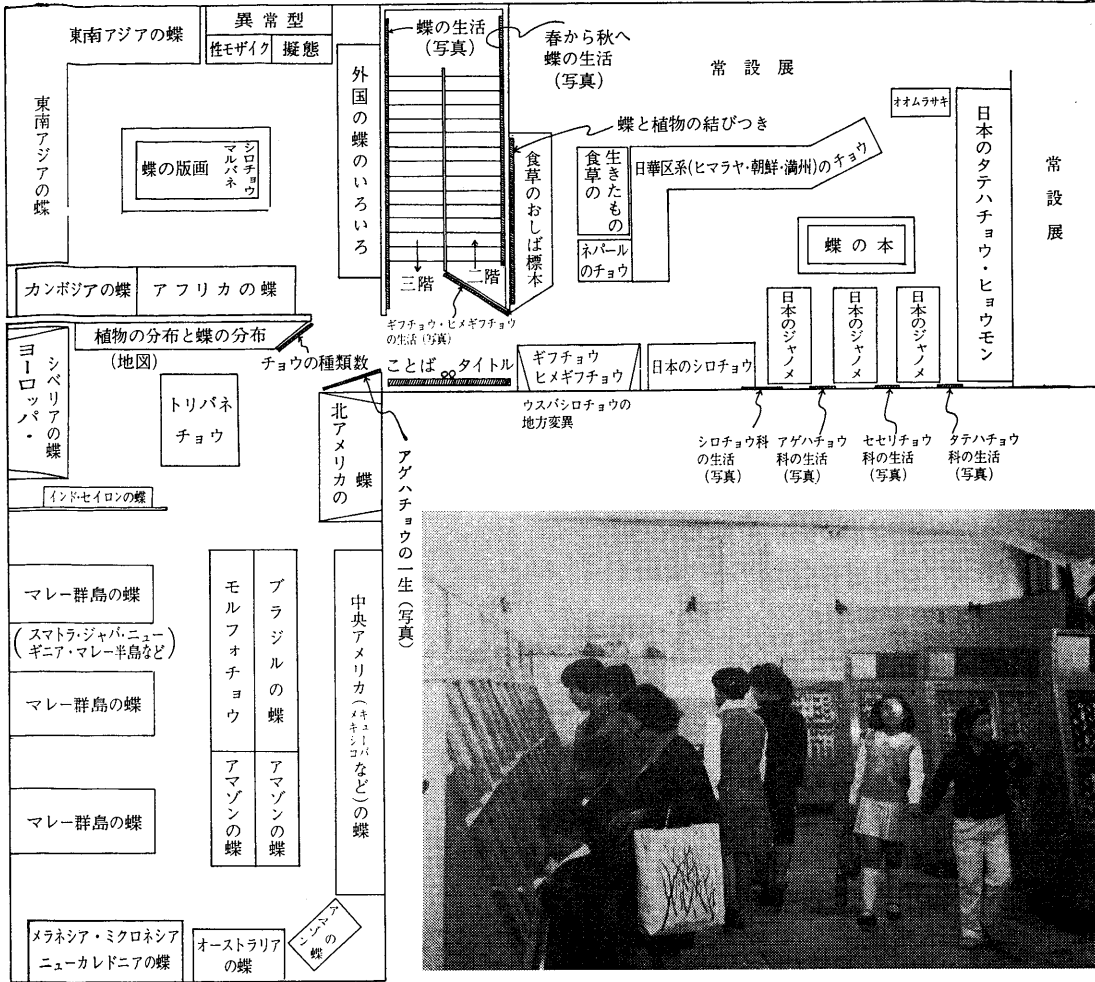
大阪市立博物館(城内)が昭和45年2月1日—28日に行なった上記特別陳列にあたり、当館が資料整理と展示計画への助言を行なった。堀田竜之助(1819—88)は大阪の本草家で、遺品が昨年、大阪市へ寄贈されたものである。魚類・各種海産動物・昆虫・植物の画稿や本草書などを展示の段階にまで整理し、展示にあたっては、昆虫・植物などの標本を説明のため出品した。幕末から明治の初期のころの大阪周辺の本草学界の状態が理解できるよう展示を組立てた。



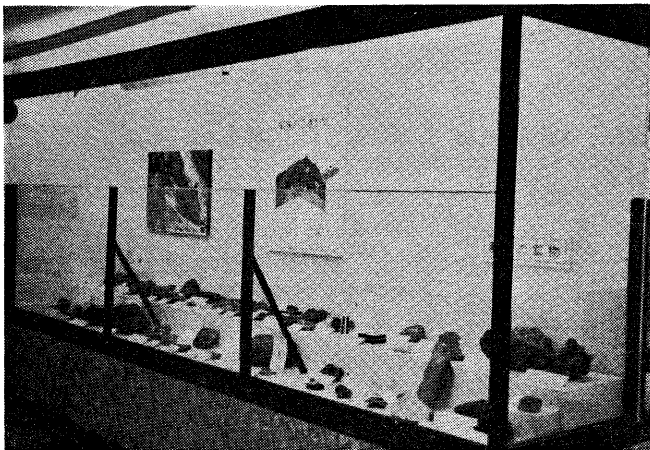
特別展「世界の蝶・日本の蝶」



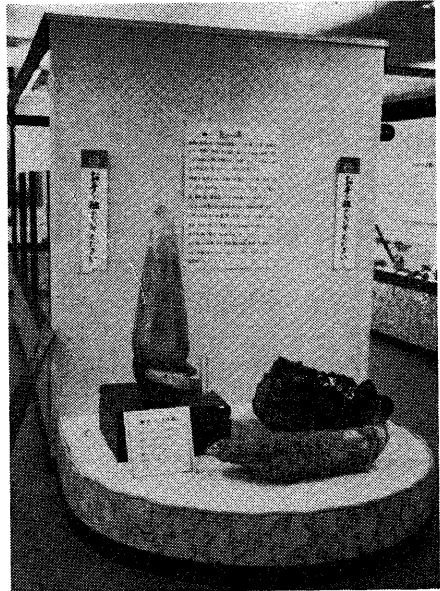
特別展「世界の蝶・日本の蝶」



特別展「世界の蝶・日本の蝶」



特別展「鉱物展」(上, 右とも)



8. 普及指導事業

8—1 昭和43年度

月 日	行 事 名	定 員	参加数	場 所	備 考
4/14	地質調査実習	50人	49人	武田尾	中学生以上対象
4/28	谷川の動物しらべ	50組	300人	能勢ハツ谷	(親と子の自然をみる会①)
5/26	ハチの生活観察	50人	51人	武田尾	中学生以上対象
6/2	高山植物園見学	50人	30人	六甲高山植物園	中学生以上 講師 堀田 満氏
6/16	チョウの子供さがし	30組	60人	能勢初ツ谷	(親と子の自然をみる会②) 講師 川副昭人氏
6/23	カエルの声をきく	30人	50人	岸和田市	一般成人対象
8/1 } 8/3	山の生物をみる	100人	80人	兵庫県夜久野 鉢伏山	(親と子の自然をみる会③) 2泊3日でバス2台をチャーターして 山の植物昆虫の採集並びに鉱物の採集 を行った。
8/12 } 8/13	笠置山の昆虫、植物採集	50人	50人	笠置山周辺	大阪自然研究会主催 1泊2日の行程で笠置山の自然観察会 を行った
8/22 } 8/24	シダ植物講習会	50人	33人	大和郡洞川	成人対象 1泊2日
9/1	標本同定会		620人	当館講堂	外部講師17名
9/4	鳴く虫をきく	50人	40人	高安山山上	一般成人対象
9/7	鳴く虫をきく	30組	80人	道明寺	(親と子の自然をみる会④)
9/17	鳴く虫かんさつ	30組	52人	能勢一の鳥井	(親と子の自然をみる会⑤)
10/5	動物園見学 (動物園のケモノをみる)	毎回 50人	延 207人	天王寺動物園	毎週土曜日4回開催。 特にケモノを中心に観察した。
10/27	赤トンボ採集	30組	62人	光明院	(親と子の自然をみる会⑥)
11/17	タケとササ講習会	50人	35人	六甲山	一般成人対象
11/17	地質調査法実習	50人	34人	六甲山	中学生以上対象
11/24	大阪層郡見学会	50人	32人	茨木市	成人対象 講師 石田志郎
12/7	コケ植物講習会	50人	37人	六甲山	一般成人対象
12/8	動物の冬ごしかんさつ	50組	88人	奈良県松尾山	(親と子の自然をみる会⑦)
12/22	化石さがし	100組	20人	奈良県榛原	(親と子の自然をみる会⑧)
1/26	冬の水鳥をみる	50組	58人	兵庫県小野市	(親と子の自然をみる会⑨) 講師 真下 弘
2/15	早春の温室見学	50人	42人	天王寺植物園	一般成人対象 講師 児玉 務
2/16	化石さがし	100組	84人	奈良県榛原	(親と子の自然をみる会⑩) 講師 金子寿衛男
3/26	地質調査法実習	50人	33人	和歌山県かつらぎ	一般成人対象 講師 秋元 宏
			2227人		

8-2 昭和44年度

月 日	行 事 名	定 員	参加数	場 所	備 考
5/11	谷川の生物しらべ	60組	89人	奈良県当麻町	親子の自然をみる会① 講師 谷 幸三
5/18	谷川の生物しらべ	70組	155人	奈良県三田市	親子の自然をみる会②
6/ 1	チョウの子供さがし	100組	161人	天理市山辺の道	親子の自然をみる会③
6/25	泉北丘陵の地質見学	50人	32人	河内長野	一般成人対象
8/ 1 } 8/ 2	河は流れる	50人	22人	大和川上流 下流 金剛下水処理場	青少年を対象に川の上流から下流までの水質・生物相・地形の変化について2日間にわたり行なった。
8/24 } 8/25	沈む大阪	50人	8人	博物館 大阪港	地盤沈下と大阪の地質との関連生活に及ぼす地盤沈下の影響について2日間に渡り実地観察を行なった。
8/26	室生昆虫採集会	50組	121人	室生山	親子の自然をみる会④
8/27 } 8/28	葛城山昆虫採集会	60人	24人	葛城山	大阪自然研究会主催 講師 谷 幸三
9/ 1	標本同定会		785人	博物館	外部講師17名
9/ 6	鳴く虫をきく	30組	93人	近鉄祝園	親子の自然をみる会⑤
9/ 9	鳴く虫をきく	30組	22人	〃	親子の自然をみる会⑥
9/14	鳴く虫をきく	50人	36人	道明寺	大阪自然研究会主催
9/27	動物園の鳥をみる	毎回 50人	延 153人	天王寺動物園	一般成人対象 毎土曜日ごとに4回開催
9/28	チョウの子供さがし	50組	57人	近鉄喜志	親子の自然をみる会⑦
10/12	鉱物採集会	120人	128人	大文字山	親子の自然をみる会⑧ バス2台貸切で行動
12/21	化石採集会	100組	220人	奈良県橿原	親子の自然をみる会⑨
1/25	冬の鳥をみる会	50組	96人	兵庫県小野市	親子の自然をみる会⑩
2/22	動物の冬越観察会	50組	142人	松尾山	親子の自然をみる会⑪
3/26	化石採集会	40組	103人	神戸市垂水	親子の自然をみる会⑫
			2,447人		





ANNUAL REPORT

of the

Osaka Museum of Natural History

for the year

1968-1969

Utsubo Park, Nishi-ku. Osaka 550, Japan.
